

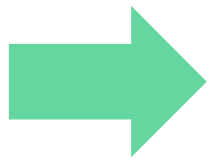
第41回すわ大昔フォーラム
『太平記』に見る
中先代の乱

令和7年3月8日（土）

諏訪市博物館 学芸員 三嶋 祥子

本日の内容

- ◆ 諏訪の人物が大きく関与し、日本の歴史を動かした「中先代の乱」について、その概要を軍記物語『太平記』を題材に解説
- ◆ この出来事に関連する、諏訪の歴史を知る上で重要なポイントとなる事柄を紹介



キーワードは

大祝・諏訪盛重・諏訪神党・諏訪頼重・諏訪円忠

中先代の乱とは

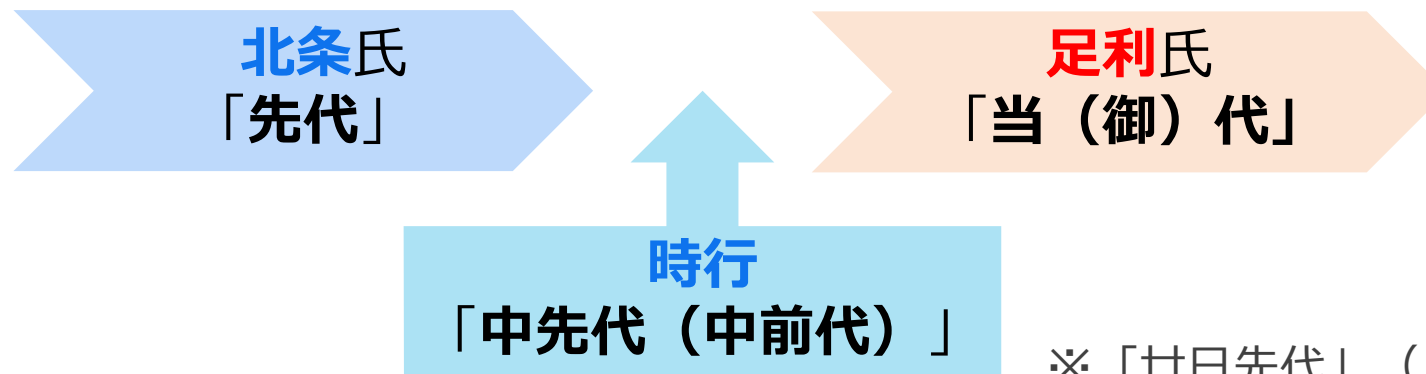
建武2年（1335）7～8月に**北条時行**が**後醍醐天皇**の**建武政権**に対して起こした反乱。**諏訪頼重**が大きく関わり、一時**鎌倉の奪還に成功**。

南北朝の分裂・室町幕府成立のきっかけとなった、日本の歴史を揺るがした大事件。

中先代の乱の結末

- ◆ **北条時行**・**諏訪頼重**の軍はすぐに**足利尊氏**軍の反撃によって敗北し、**頼重**は鎌倉で郎党と共に自害した。時行は鎌倉から脱出。

【「中先代」の名称】



※「廿日先代」（『梅松論』）

北条高時の遺児・時行①

北条時行（幼名 亀寿丸・亀寿・勝長寿・全寿...）

鎌倉幕府最後の**得宗**・北条高時の次男



【 得 宗（とくそう） 】

執権（将軍の後見役）を代々務めた北条氏嫡流の家督。
鎌倉幕府の**執権**と**連署**（執権の補佐役）は代々北条氏のみが就いた。

時政 — 義時 — 泰時 — 時氏 — 経時 — 時頼 — 時宗 — 貞時 — 高時

北条高時の遺児・時行②

- ◆ 鎌倉幕府滅亡後、**北条時行**は「**諏訪盛高**」によって鎌倉を脱出。（『太平記』）
- ◆ **中先代の乱**までの間の2年間、**諏訪氏**（**頼重**か）が匿った。

諏訪盛高

諏訪上社**大祝**（おおほうり）諏訪家の人物。不詳。

※鎌倉幕府滅亡時、時行は当時推定5歳（正確な生年は不詳）。
8歳くらいとする説もある。

時行が過ごした頃の諏訪の様子

- ◆ **大祝**の邸宅「**神殿**（ごうどの）」は前宮の現在の社務所裏にあった。
 - ➡安土桃山時代までに現在の地・中洲神宮寺宮田渡に移転
- ◆ 本宮周辺には**神宮寺**の堂宇が広がっていた
 - 正応2年・1289 **普賢堂**建立
 - 永仁2年・1294 （法華寺）**釈迦三尊像**造立
 - 延慶元年・1308 **五重塔**

中先代の乱の様子が詳しく書かれた主な史料

『太平記』

14世紀後半頃に成立した**軍記物語**
作者**不詳**

※軍勢数の誇張など、史実とは考えにくい部分や史実と異なる内容もある。

『梅松論』

貞和5年（1349）頃に成立した歴史書
足利尊氏寄りの書かれ方で、作者は室町幕府の関係者と
考えられている。

『太平記』とは①



貞松院所蔵『太平記』

- ◆ 全 **40** 巻から構成
- ◆ **後醍醐天皇**の即位（文保2年・1318）から、の**細川頼之**の幕府管領就任（貞治6年・1367）までの約50年間を描く。
 - 後醍醐天皇**・・・鎌倉時代末期から室町時代前期の天皇
 - 細川頼之**・・・室町幕府二代将軍**足利義詮**死去に伴い、幼い三代将軍**義満**の補佐として幕府管領（執事）に主任
- ◆ 知識人の冷徹な筆で書かれる。

『太平記』とは②

第一部（巻1～巻11）

後醍醐天皇の北条高時討伐計画、正中・元弘の乱、北条氏討伐、鎌倉幕府滅亡

第二部（巻12～巻21）

後醍醐天皇の建武の新政、足利尊氏の策謀、南北朝の争い、後醍醐天皇崩御

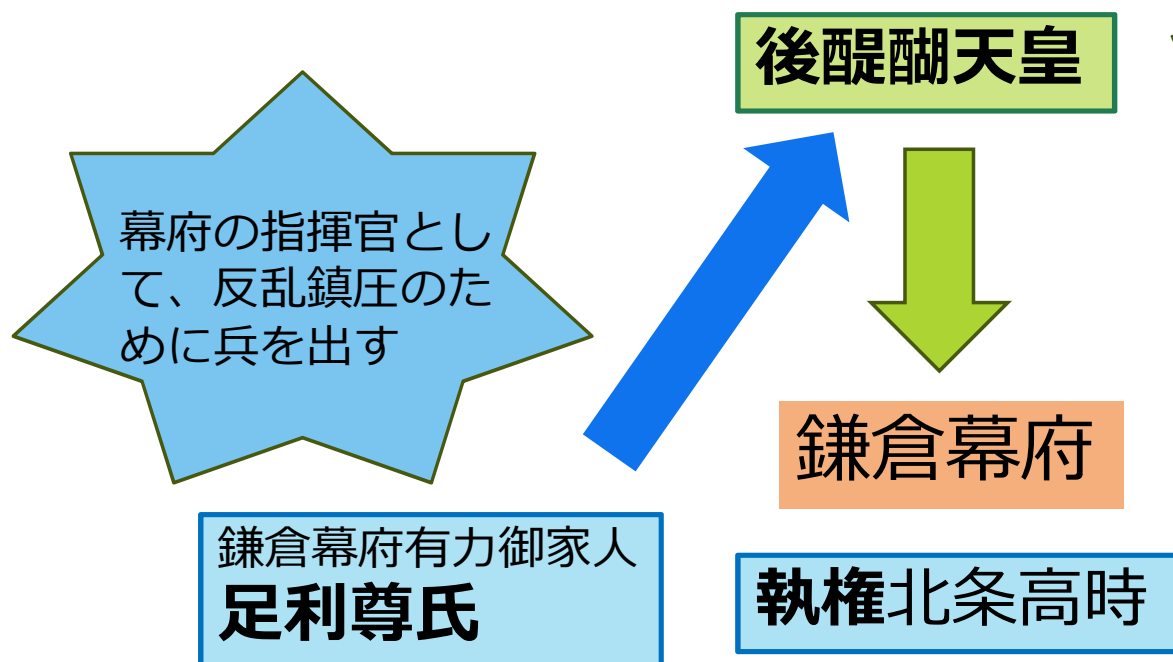
第三部（巻23～巻40）

観応の擾乱（足利尊氏と直義の対立）、将軍義詮の死、細川頼之の執事職就任

『太平記』に見られる中先代の乱の記述

- ◆ 卷十「亀寿殿 令落信濃事付、左近大夫偽落奥州事」
・・・盛高が時行を連れ出す ①
- ◆ 卷十「高時并一門以下於東勝寺自害事」
・・・諏訪氏一族が高時と東勝寺で自害 ②
- ◆ 卷十三「中前代蜂起事」
・・・時行・頼重の軍が鎌倉を奪還 ③
- ◆ 卷十三「足利殿東国下向事付時行滅亡事」
・・・尊氏勢に敗れ頼重が大御堂で自害 ④

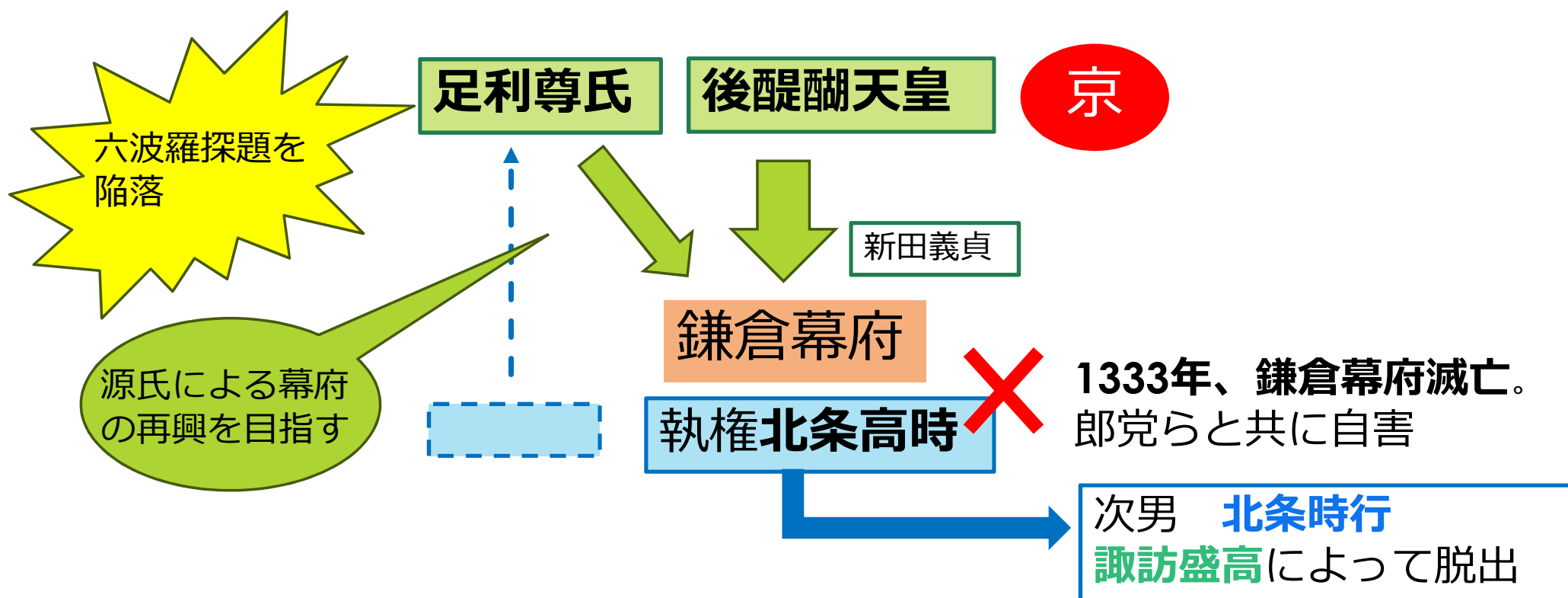
中先代の乱が起こった背景①



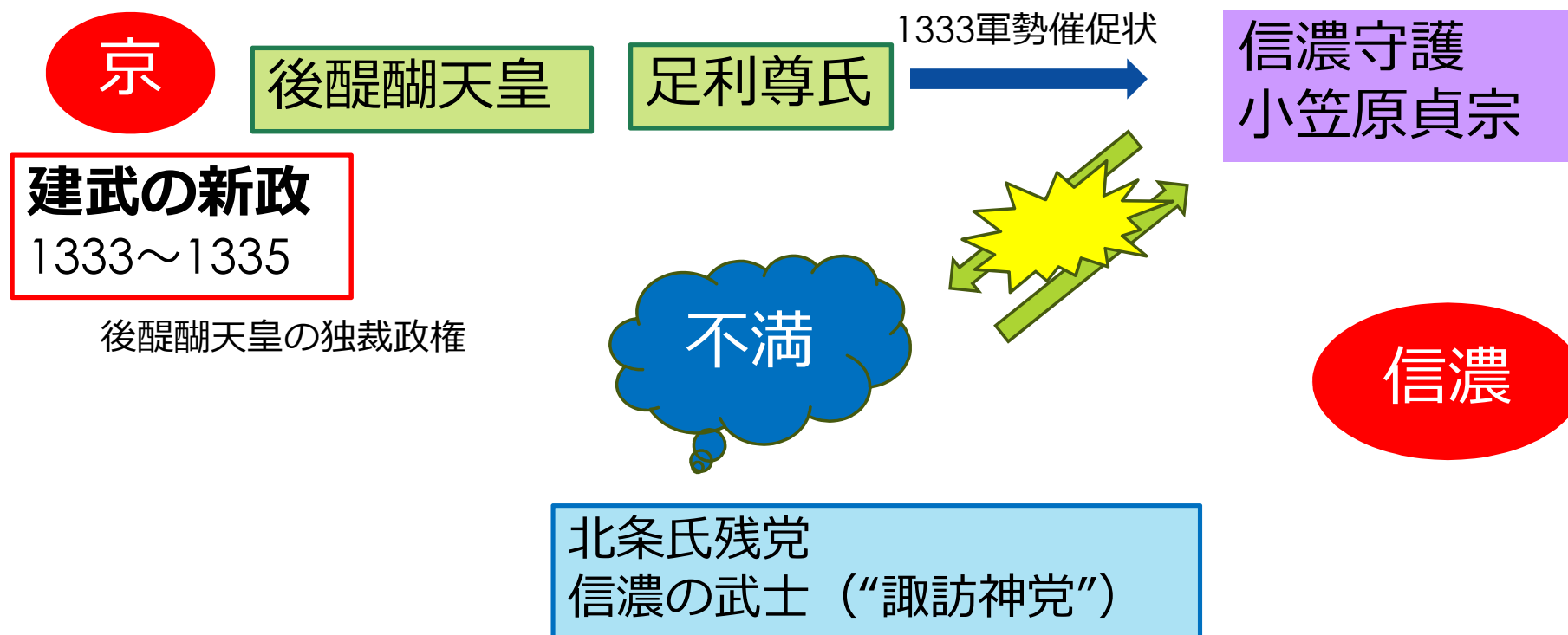
倒幕運動

- ①**承久の乱**（1221）
朝廷（後鳥羽上皇）VS北条家
・・・後鳥羽方敗北
- ②**正中・元弘の乱**（1331）
後醍醐天皇による倒幕計画
→後醍醐天皇、隠岐へ**配流**
→隠岐を**脱出**

中先代の乱が起こった背景②



中先代の乱が起こった背景③



中先代の乱①

京

後醍醐天皇

足利尊氏

鎌倉將軍府

足利直義

西園寺公宗

北条時興（泰家）
（時行の叔父）後醍醐天皇暗殺
計画が露見

不和

1334 後醍醐天皇の皇子
護良親王が捕縛・鎌倉へ配流政権内
が動揺殺害
（時行との
共謀を恐れて）

逃

鎌倉

建武2年（1335）
7月24日 奪還！

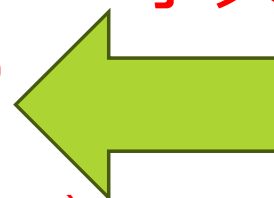
挙兵！

北条時行

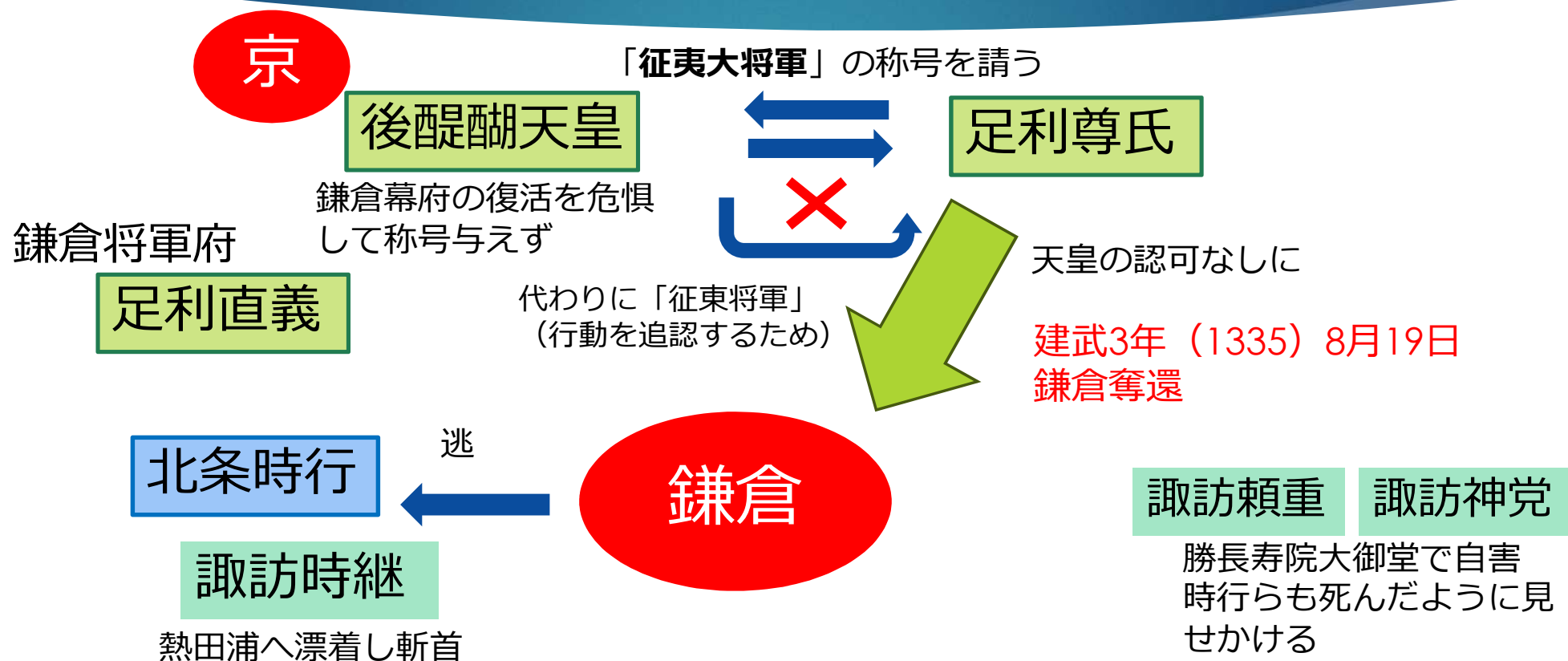
諏訪頼重

信濃

諏訪神党



中先代の乱②



諏訪神党と信濃武士

- ◆ **諏訪社**への祭礼への参加を通じて**信濃武士**に**諏訪信仰**が広まる
- ◆ 平安時代末期から**諏訪の神**を**軍神**として深く信仰した人々が**武士化**
- ◆ 上社大祝**諏訪**氏の本姓である「**神**（みわ・じん）」を名乗った
 - ➡ **“諏訪神党”** ※仮称（祢津、海野、望月...）
- ◆ 信濃には多くの牧があり**名馬**の産地だった ➡ **有力な武士団**が成長
- ◆ 特に**諏訪社**や**諏訪信仰**は**源頼朝**から重要視されていた
- ◆ **頼朝**は下社大祝**金刺盛澄**を御家人として重用
- ◆ **鎌倉幕府**の保護の下行われた**御射山神事**

鎌倉幕府と諏訪氏

- ◆ **諏訪氏**は鎌倉幕府で**得宗被官**（北条家の専属御家人）「**御内人**」を代々務めた
- ◆ **諏訪盛重**が鎌倉幕府で**御内人**を務めた確認できる最初の人物
- ◆ 盛重の子**盛経**・孫**宗経**も代々**御内人**を務めた（世襲されていた）
- ◆ **承久の乱**（承久3年・1221）での**諏訪の武士団**の働きが評価され、当時**大祝**だった**盛重**はその後**大祝**の職を辞して鎌倉へ出仕 ※大祝郡外不出の掟

以後、**大祝**を辞した人物が**武士**となる。

諏訪盛重という人物

諏訪盛重（蓮仏）

- 承久の乱（承久3年・1221）で嫡男信重を戦に出陣（『諏訪大明神画詞』）
- 寛喜2年（1230）～弘長元年（1261）まで鎌倉で活躍（『吾妻鏡』）
- 盛重は北条時頼の最期（弘長3年<1263> 享年36）を看取っている。（『法然上人絵伝』）
- 「外記日記」文永4年（1267）4月27日の条（『信濃史料』）
「関東の諏方兵衛入道、去る此、死去すと云々」
※「兵衛入道」＝盛重とみられる

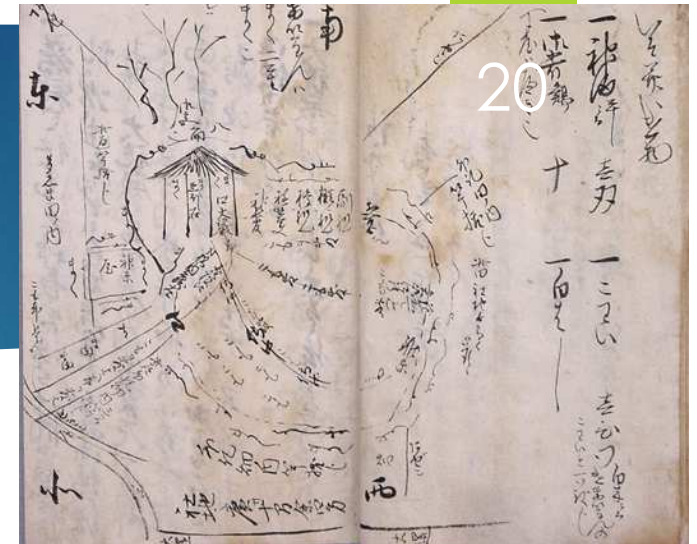
※別人物か

大祝とはなにか？

- ◆ **現人神**（生き神様）（大祝諏方家文書・当館所蔵）
- ◆ **諏訪大明神**が人間の形で現れた姿
- ◆ 「祝八神明ノ垂迹ノ初メ御衣ヲ八歳ノ童子ニヌキキセ給テ大祝ト称シ、我ニ於テ体ナシ、祝ヲ以テ体トスト神勅アリケリ」（『諏訪大明神画詞』）
- ◆ 上社大祝の即位式では鶏冠社で**神長官**によって大祝に御衣（みそ）が着せられ、秘法が伝授された。
- ◆ 大祝の職は上社・下社ともに江戸時代末までであった（明治維新で廃止）。

大祝即位式場図

（大祝諏方家文書・当館所蔵）

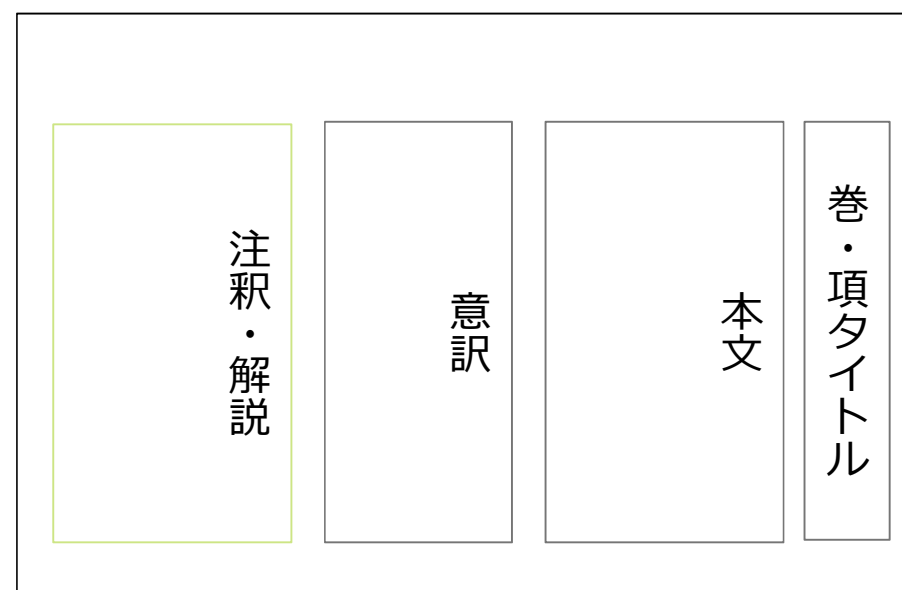


復元・大祝即位式場（八角神殿）
（※現在は展示なし）



『太平記』の記述を 見ていきましょう

見方



各項の全文は配布資料に掲載しています

諏訪盛高 北条泰家に切腹を進める

卷十「亀寿殿 令落信濃事付、左近大夫偽落奥州事」

ここに相模入道殿の舎弟四郎左近太夫入道の方に候ひける諏方左馬助入道が子息、諏訪三郎盛高は、数度の戦いに郎等皆討たれぬ。

只、主従二騎に成つて、左近太夫入道の宿所に來て申しけるは、「鎌倉中の合戦、今は是までと覺て候間、最後の御伴仕り候はん爲に参つて候。早思し召し切らせ給へ。」

北条泰家のところに諏訪盛高が來た。盛高は幾度の戦いで郎党が皆討たれた。

主従二騎を連れて泰家に言つたことは、「今が最後だと思われるので、思い切つて自害してください。」

- ▶ 四郎左近太夫入道...
北条泰家（高時の実弟・時行の伯父）
- ▶ 盛高は盛重の子とみられる→左馬助入道＝盛重か
- ▶ 盛高＝頼重と記す資料もある

北条泰家、時行を逃がすよう命じる

- ▶ 齊国では、落ち延びた小伯＝桓公が再び国を再興させた。→**泰家**自身も簡単に自害はできない。
- ▶ **泰家**は**盛高**にも生き延びることを勧める。
- ▶ 素懷＝志＝**北条**の復活

「…そなた（**盛高**）も思慮を巡らせてどこに隠れ忍ぶか、または降伏して命を繋ぐべきだ。そして私（**泰家**）の甥である**亀寿**（**時行**）を隠し置いて、時が来たら再び大軍を起こして**北条**を復活させてほしい。…」

…御辺も能々遠慮を回らして、何なる方にも隠し忍ぶか、然らずんば降人に成て命を継いで、甥にてある**亀寿**を隠し置いて時至りぬと見ん時再び大軍を起こして素懷を遂げらるべし。…

卷十「亀寿殿 令落信濃事付、左近大夫偽落奥州事」

盛高、涙を押さえて命に従うことを決める

卷十「亀寿殿 令落信濃事付、左近大夫偽落奥州事」

盛高涙を押さへて申しけるは、「今までは一身の安否を御一門の存亡に任せ候ひつれば、命をば惜しむ候はず。御前にて自害仕りて、二心なき程を見へ進らせ候はんずる爲にこそ、是まで参つて候へ共、『死を一時に定むるは易く、謀を万代に残すは難し』と申す事候へば、兎も角も仰せに随ふべく候。…」

盛高は一門の存亡に従いながらも自害をするつもりでいたため、涙しながら泰家の命に従うことを決めた。

- ▶ 盛高は北条家に忠心を示すために、泰家と共に自害するつもりだった。
- ▶ 「死をすぐに決めることは易いが、遠い先の謀のために生きながらえるのは難しい。」

盛高、連れ出すために時行を迎えに行く

- ▶ 万寿...時行の兄・邦時
- ▶ 宗繁...五大院宗繁（邦時・時行の叔父）
- ▶ 亀寿は高時の側室の屋敷に女房と共にいた。
- ▶ 盛高は女性には後で人に話を漏らすかもしれないと危惧し、事の次第を伝えなかった。
- ▶ 高時が自害する前に時行を一目見たがっている、と嘘をついた。

盛高は、「大殿（高時）がわが子を最期に一目見たいと言っているため亀寿様のお迎えに上がった。」と言うと、女房は「万寿様は宗繁様に預けたので安心だ。亀寿様のこともくれぐれもよろしく。」と涙を流しながら言った。

（盛高）「…大殿計こそいまだ葛西谷に御座候へ。公達を一目御覧じ候て、御腹を召るべしと仰せそ候間、御迎ひの爲に参て候。」と申しければ、お局うれし氣に御座つる御氣色、しほしほと成せ給て、「万寿をば宗繁に預けつれば心安し、構て此の子をも能々隠してくれよ。」と仰せも敢ず、御涙に咽ばせ給しかば：

卷十「亀寿殿 令落信濃事付、左近大夫偽落奥州事」

時行の兄、北条邦時の最期

卷十「亀寿殿 令落信濃事付、左近大夫
偽落奥州事」

「万寿御料をも**五大院右衛門**
宗繁が具足し進せ候つるを、
敵見付けて追懸進せ候しかば、
(略) 若子をば指殺し進せ、
我が身も腹切て焼け死に候つ
る也。(略) とても隠れあるま
じき物故に、(略) 幼き御屍に、一
家の御名を失はれん事口惜く候。
其よりは大殿の御手に懸られ給
ひて冥途までも御伴申させ給ひ
たらんこそ、生々世々の忠孝にて
御座候はん。…」

「万寿は、**五大院宗繁**が連れて
行つたが、敵に見つかり追いか
けられた。**宗繁**は、若君を刺し
殺し、自分も腹を切つて焼け死
んだ。とても隠れ切ることとはで
きなかった。そうなるくらいな
ら**大殿**の手にかかつて死んだ方
がいい。…」

- ▶ **万寿**は叔父・**宗繁**に連れられて脱出したものの、敵方に見つかつて**宗繁**の手で刺し殺され、**宗繁**自身も腹を切つて焼け死んだ。
- ▶ 女房たちは**宗繁**によつて無事に逃げたと思つて安心していましたが、生き延びていなかった。
- ▶ 「父親と共に死ぬのがいいため連れて行く」

盛高、女房らから亀寿を奪い取る

- ▶ 女房たちは「私たちを殺してからにしない」と言ったが、盛高は女房たちから奪い取るようにして亀寿を連れて行った。
- ▶ 盛高は行き先を知られないように急ぎ去った。
- ▶ 盛高も本当は亀寿は生き延びることを女房に伝えたかった。

女房は、はだして人目も気にせず走り出し、盛高を追いかけた。盛高は行き先を知られまいと馬を進めた。女房は盛高が見えなくなると「これから誰のために生きればいいのか」と言つて古井戸に身を投げて死んだ。

御乳母の御妻は、歩蹠にて人目をも憚らず、走り出でさせ給て、四五町が程は、泣いては倒れ、倒れては起き迹に付いて追われけるを、盛高心を強く行き方を知られじと、馬を進めて打つ程に後ろ影も見へず成りにければ、御妻、「今は誰をぞだて、誰を憑んで命を惜しむべきぞや。」とて、あたりなる古井に身を投げて、終に空しく成り給ふ。

卷十「亀寿殿 令落信濃事付、左近大夫偽落奥州事」

盛高、時行を連れて諏訪へ向かう

- ▶ 諏訪の祝...諏訪頼重か
- ▶ 「中前（先）代」の名称
- ▶ 泰家は幕府再興を企てると言って奥州へ向かった。
- ▶ 鎌倉幕府滅亡 = 1333年
中先代の乱 = 1335年

盛高はこの若君を連れて信濃へ落ち下った。諏訪の祝を後ろ盾にして、建武元年の春の頃、しばらく関東を攻め、天下の大軍を率いて、中前代の大将となつた相模二郎という人物がこの若君である。

盛高此の若公を具足して、信濃へ落ち下り、諏訪の祝を憑んで有りしが、建武元年の春の頃、暫く関東を攻略して、天下の大軍を起こし、中前代の大將に、相模二郎と云ふは是なり。

卷十「亀寿殿 令落信濃事付、左近大夫偽落奥州事」

北条に先立って諏訪直性など郎党が切腹

卷十「高時并一門以下於東勝寺自害事」

道準盃を取つて、「あはれ肴や、何なる下戸なり共此をのまぬ者非じ。」と戯れて、其盃を半分計り飲み残して、**諏訪入道**が前に指し置き、同じく腹切つて死にけり。**諏訪入道直性**、其盃を以て心閑かに三度傾けて、**相模入道**の前に指し置いて、(略)腹十文字に掻き切つて、其刀を抜いて**入道殿**の前に指し置いたり。

(摂津刑部太夫入道) 道準は盃を**諏訪入道**の前に置くと腹を切つて死んだ。
諏訪入道直性は、その盃を静かに三度傾けて**相模入道**の前に指し置き、(略)腹を十文字に切つて、その刀を**入道**の前に置いた。

- ▶ **諏訪入道直性**...**諏訪宗経**か
- ▶ **相模入道**...**北条高時**
- ▶ **諏訪直性**は**北条高時**に先立って切腹した。
- ▶ **直性**らの後**高時**が自害。それに他の郎党が次々と続いた。

北条高時 870人の郎党と共に自害

卷十「高時并一門以下於東勝寺自害事」

死骸は焼けて見へね共、後に名字を尋ねれば、此一所にて死する者、総て八百七十余人なり。此外門薬・恩顧の者、僧俗・男女を云はず、聞き伝え聞き伝え泉下に恩を報る人、世上に悲しみを促す者、遠国の事はいざ知らず、鎌倉中を考るに、総て六千余人なり。

死骸は焼けてわからないが、後で聞くとここで亡くなった人は八百七十人にもなった。遠国のことはわからないが、鎌倉だけでも六千人余りいた。

▶ 東勝寺で自害した北条氏郎党は総じて870人余。



腹切りやぐら（鎌倉市 ※現在は立入禁止）

疑問 その①

北条泰家はなぜ諏訪盛高に亀寿丸を託したのか。

諏訪頼重とは

- ◆ 「諏訪頼重」・「三河守」・「照雲入道」
- ◆ 頼重に関する史料はほぼなし。「中先代の乱を起こした人物」という情報のみ。
- ◆ 鎌倉から脱出した北条時行を匿った
- ◆ 諏訪上社大祝諏訪家の人物
- ◆ 頼重が実際に「大祝」の職に就いていたかは不明（「大祝」と書かれる史料と書かれない史料がある）。
- ◆ 頼重の親子関係は不詳。系図によってそれぞれ情報が異なる。

諏訪家系図でみる諏訪頼重①

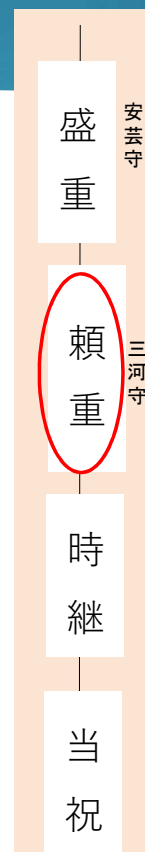
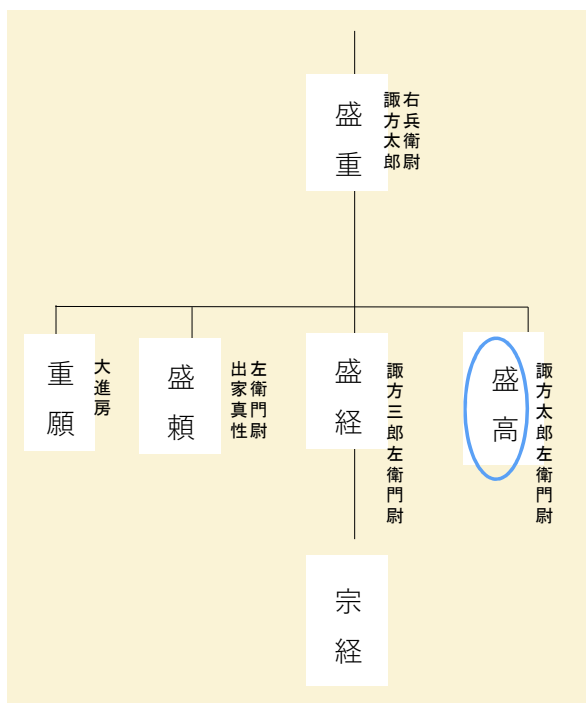
諏訪家の系図の例

- ◆ 『尊卑分脈』（室町時代編纂）
- ◆ 「信濃国伴野莊諏訪神社神田相伝系図」（大徳寺文書／『大日本古文書』
『諏訪史』第二巻に写真掲載有り）
- ◆ 前田家本「神氏系図」（尊経閣文庫、大祝諏方家文書／当館蔵 ≡「異本阿蘇氏系図」）
- ◆ 諏訪家系図（大祝諏方家文書 江戸時代初期か／当館蔵）
- ◆ 『寛政重修諸家譜』（寛政年間編修）
- ◆ 『系図纂要』（江戸時代末期編纂）
- ◆ 諏訪家譜（中田憲信著 明治37年 『諏訪史料叢書』所収）

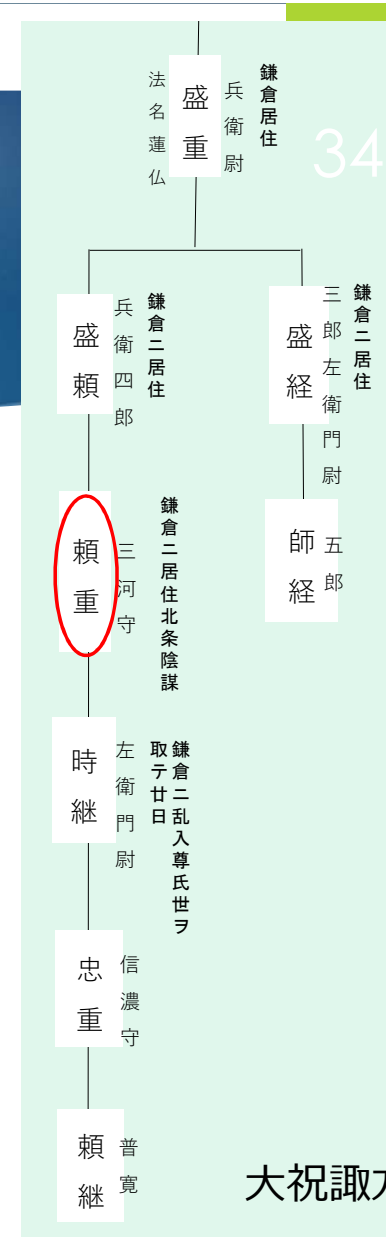
➡書かれている内容
が全て異なる

諏訪家系図でみる諏訪頼重②

『尊卑分脈』

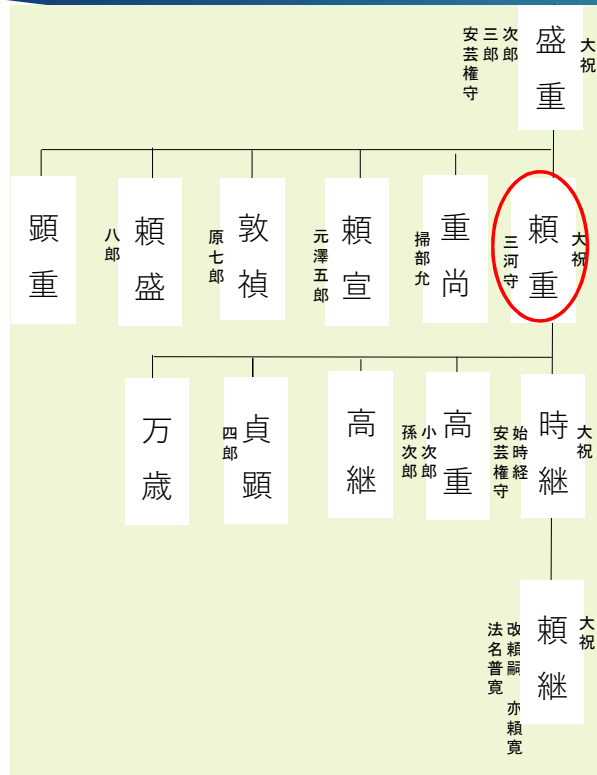


「信濃国伴野莊諏訪神社神田相伝系図」



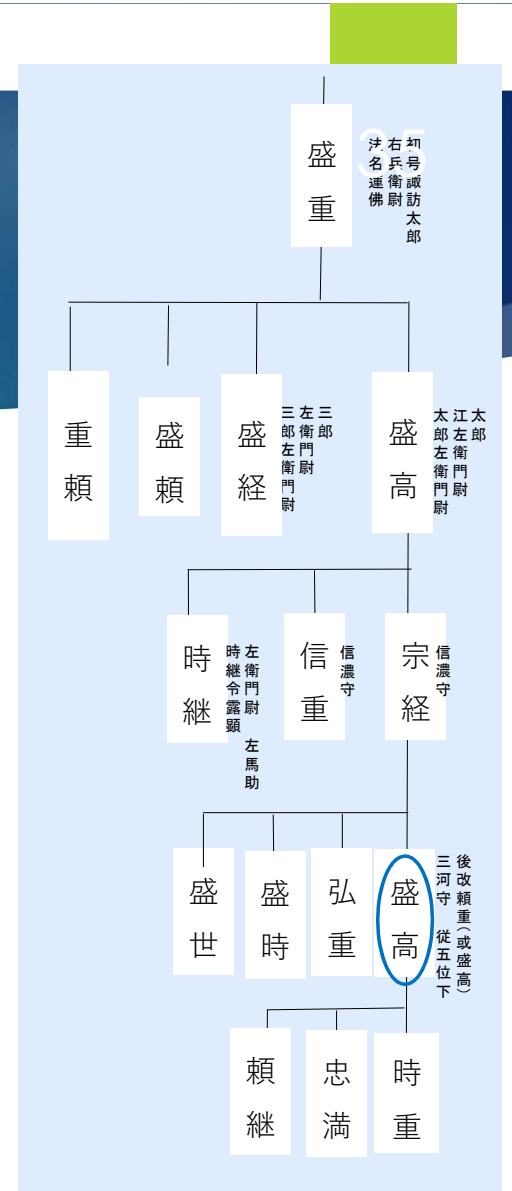
大祝諏方家資料

諏訪家系図に見る諏訪頼重③

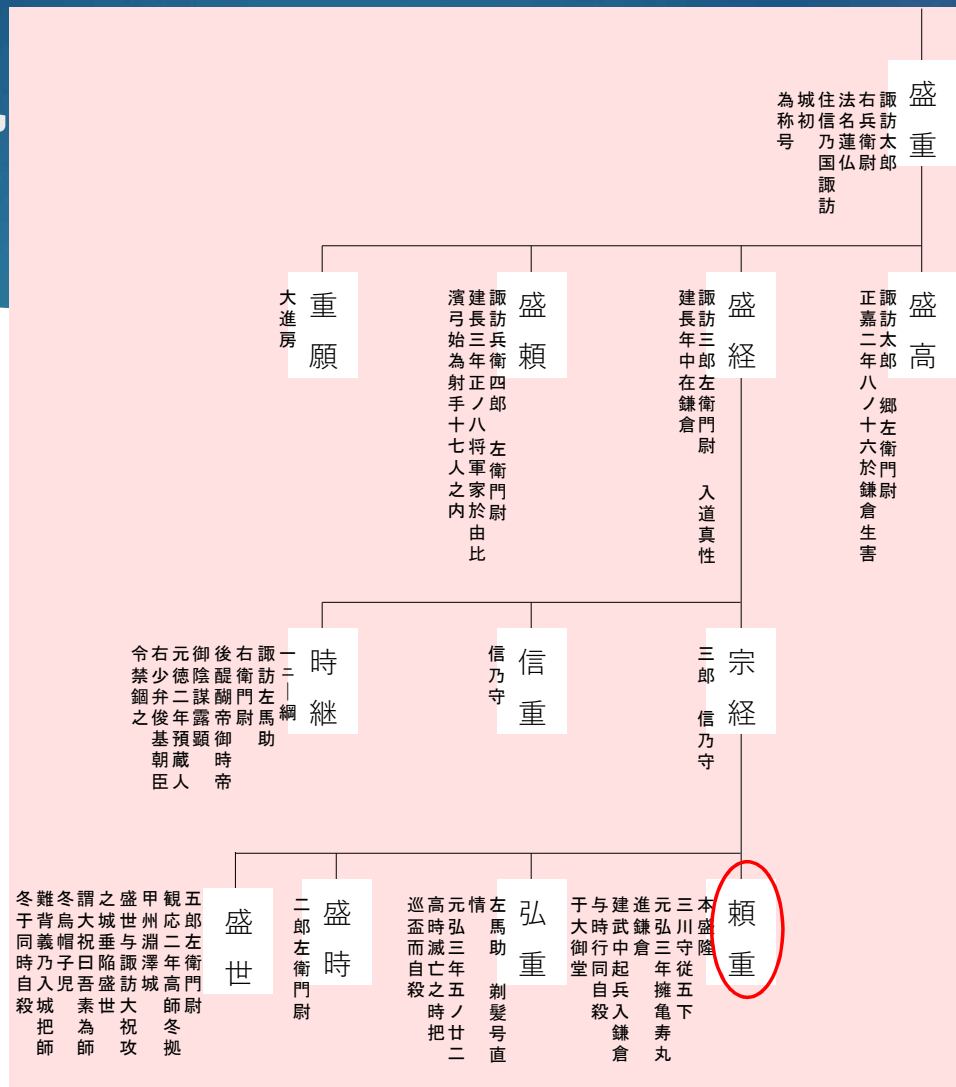


前田家本
「神氏系図」

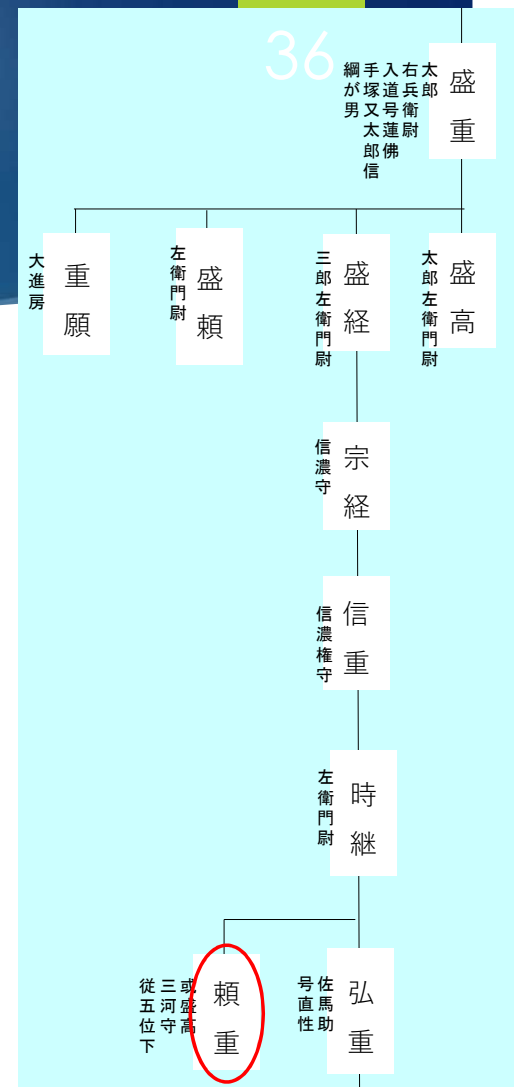
「諏訪家譜」
(『諏訪史料叢書』)



諏訪家系図に見る諏訪頼重③



『系図纂要』



『寛政重修諸家譜』

諏訪家系図に見る諏訪頼重④

諏訪頼重の出自について可能性として挙げられること

- ◆ 盛重の子
- ◆ 宗経の子
- ◆ 頼重 = 盛高



頼重供養塔（諏訪大社上社前宮）

北条時行・諏訪頼重軍が挙兵

- ▶ 西園寺大納言...関東申次
西園寺公宗
- ▶ 西園寺公宗が泰家（時興）と後醍醐天皇暗殺を企てたが未然に発覚。
- ▶ 泰家（時興）...京の大將
時行...関東の大將
名越時兼...北国の大將
とする反乱を計画していた。

西園寺大納言の陰謀が発覚すると、京都攻略を企む平家が東国・北国を出発した。
 （略）多くの陣が加わり、すぐに六千余になつた。時行には諏訪三河守らがついて、五十余人になり、関東の六国の軍勢が付いた。

卷十三「中前代蜂起事」
 ：・西園寺大納言公宗郷陰謀露顕して誅せられ給ひし時、京都にて旗を挙げんと企てつる平家の余類共、皆東国・北国に逃げ下つて、猶其素懷を達せん事を謀る。（略）多く余力して、程無く六千余騎に成にけり。
 相模次郎時行には、諏方三河守（略）五十余人与してければ、伊豆・駿河・武蔵・相模・甲斐・信濃の勢共相付かずと云ふ事なし。

北条時行・諏訪頼重軍 鎌倉に向かう

卷十三「中前代蜂起事」

時行其勢を率して、五万余騎、俄に信濃国に打ち越えて、時日を替えず則ち鎌倉へ責め上りける。澁河刑部大夫・小山判官秀朝武藏国に出合ひ、是を支んとしけるが、共に戦利無しして、兩人所々にて自害しければ、其郎従三百余人、皆兩所にて討たれにけり。又新田四郎上野国利根川に支へて、是を防がんとしけるも、敵目に余る程の大勢なれば、一戦に勢力を碎かれ、二百余人討たれにけり。

時行軍五万余騎が信濃国を出て同じ日に鎌倉へ攻め上った。澁川刑部大夫・小山秀朝と武藏国で、新田四郎と上野国で戦い、いずれにも勝利した。

- ▶ 時行勢に対抗するために澁河義季・小山秀朝・新田四郎の多くの兵が出るものの、ことごとく敵わない。
- ▶ 足利軍は計二百人余りが討ち死にした。

北条時行、ついに鎌倉を奪還

- ▶ **直義**自身が出陣するも戦利なしと判断して兵を退く。
- ▶ 諏訪を出立してから約一か月かけて鎌倉を奪還。
- ▶ **直義**は鎌倉を脱出する道中で護良親王を殺害（**時行**との連携を危惧したか）。
- ▶ 日付は諸説あり。奪還の期間は7月24日～8月19日が有力。

時行の軍はますます大勢になり、三方向から鎌倉へ押し寄せた。**直義**は兵の用意が間に合わず、この戦に勝ち目なしと見て、將軍の宮（成良親王）を連れて七月十六日未明、鎌倉を脱出した。

時行 弥大勢に成りて、既に三方より鎌倉へ押し寄する
と告げれば、**直義**朝臣は事の急なる時節、用意の兵少かりければ、角ては中々敵に利を付べしとて、將軍の宮を具足し奉つて、七月十六日の曉に、鎌倉を落ち給ひけり。

卷十三「中前代蜂起事」

時行・頼重軍の鎌倉奪還までの進路



- | | |
|------|---------|
| 6/23 | 諏訪を出発 |
| 7/14 | 青沼の戦い |
| 7/ | 女影原の戦い |
| 7/ | 小手指原の戦い |
| 7/22 | 井出沢の戦い |
| 7/24 | 鎌倉入り |

鈴木由美著『中先代の乱』より転載

疑問 その②

中先代の乱で、**北条時行**・**諏訪頼重**の軍が勝利できた要因はなにか。

足利尊氏・直義の反撃軍が鎌倉へ向かう

卷十三「足利殿東国下向事付時行滅亡事」

「：征夷將軍の事は関東静謐の忠に依るべし。東八箇国の管領の事は先ず子細有るべからずとて、則ち綸旨を成し下されける。」

(略)都を立たれける日は其勢僅に五百騎有しか共(略)駿河国に著き給ひける時は三万余騎に成にけり。
左馬頭直義、尊氏卿の勢を併せて五万余騎、矢矯の宿より取つて返して又鎌倉へ発向す。

「：『征夷將軍』の称号は関東を鎮めた功績で与えよう。」関東八箇国の管領はすぐに綸旨を下した。(略)尊氏が京を立つたときはわずか五百だった兵が、今や五万余になつて鎌倉へ向かつた。

- ▶ 尊氏は時行・頼重軍に立ち向かうために「征夷(大)將軍」の称号を求めた。
- ▶ 後醍醐天皇は幕府の復活に繋がると危惧して尊氏に「征夷(大)將軍」は与えなかった。
- ▶ 尊氏は相当の数の兵を集めて鎌倉へ向かった。

時行・頼重軍、出陣前に天災に襲われる

卷十三「足利殿東国下向事付時行滅亡事」

八月三日鎌倉を立たんとしける夜、俄かに大風吹いて、家々を吹き破ける間、天災遁れんとて大仏殿の中へ逃げ入り、各身を縮めて居たりけるに、大仏殿の棟梁、微塵に折れて倒れける間、其内にあつまり居たる軍兵共五百余人、一人も残らず壓しにうてて死にけり。戦場趣く門出にかかる天災に遭ふ。

八月三日の、鎌倉を出立しようとした夜、大風が吹いて家々を壊したため大仏殿の中へ逃げ込むと、大仏殿は微塵に折れて倒れた。そこに集まった五百余人は皆死んだ。戦地に赴く前に天災に遭った。

- ▶ **尊氏**が鎌倉を目指して出立した知らせを聞いた時行は、先手を討つために名越式部大夫を大将とした軍を派遣。
- ▶ 出立の夜、名越の軍が大風から逃げ込んだ大仏殿が倒壊し、五百人余の兵を失った。

時行・頼重軍 VS 尊氏・直義軍

- ▶ 源氏 = 足利方
- ▶ 平家 = 北条方
- ▶ 時行・頼重軍は
尊氏・直義軍に
連敗

平家（時行方）の後ろには、
諏訪の祝が防戦していた。両
陣終日戦うが、時行方は水飲
の峠まで陣を引いた。（略）
時行軍はこの山も防げず、大
崩まで退いた。

：平家の後陣には、諏方の
祝部身を恩に報じて、防ぎ
戦ひけり。兩陣互ひに勇氣
を励まして、終日相戦ひけ
るが、平家此をも破られて、
箱根の水飲の峠へ引き退く。
（略）平家又此の山をも支
へず、大崩まで引き退く。

卷十三「足利殿東国下向事付時行
滅亡事」

時行・頼重軍 敗れる

- ▶ 8月19日、辻堂・片瀬原で
尊氏方勝利
- ▶ 時行・頼重軍 2万騎→300騎
- ▶ 尊氏方は全ての戦いに勝利するも有力武将が複数討死。
- ▶ 尊氏方も大きな打撃を受ける。

遠江の橋本から始まり、佐夜の中山（略）十七回にも及ぶ戦いによって、平家（時行軍）の二万余騎の兵は、討たれたり疵を追って、今はわずか三百余騎になった。

始め遠江の橋本より、佐夜の中山・江尻・高橋・箱根山・相模河・片瀬・腰越・十間坂、此等十七箇度の戦ひに、平家二万余騎の兵共、或は討たれ或は疵を蒙りて、今僅かに三百余騎に成ければ……

卷十三「足利殿東国下向事付時行滅亡事」

尊氏軍の鎌倉奪還までの進路



- 8/2 京を出発
- 8/9 遠江橋本
- 8/12 遠江小夜中山
- 8/14 駿河国府
- 8/14 高橋・清見関
- 8/17 箱根
- 8/18 相模川
- 8/19 辻堂・片瀬原
- 8/19 鎌倉入り

諏訪頼重、勝長寿院で自害する

- ▶ 諏訪頼重ら43人が大御堂（勝長寿院）で自害。
- ▶ 亡骸は皆顔の皮が剥がされ、時行の逃亡を隠す。



勝長寿院跡（鎌倉市）

諏訪三河守を始めとした四十三人は大御堂の中へ入り、皆自害した。その死体は皆顔面の皮が剥がされ、誰が誰か見分けがつかない状態だった。この中に時行もいるに違いないと聞く人は哀れんだ。

諏方三河守を始めとして宗との大名四十三人、大御堂の内に走り入り、同じく皆自害して名を滅亡の跡にぞ留めける。其死骸を見るに、皆面の皮を剥いで何れをそれとも見分けざれば、相模次郎時行も、定めて此の内にぞ在るらんと、聞く人哀れを催しけり。

卷十三「足利殿東国下向事付時行滅亡事」

北条時行、鎌倉を脱出する

- ▶ 時行は実際は鎌倉を脱出して関東（伊豆か）に逃げた。
- ▶ 時行はその後さらに2度鎌倉を奪還。
- ▶ 正平7年（1352）に鎌倉郊外の刑場龍口で処刑。

時行は関東で滅び、（略）今は平家が再び再興することは難しい。昔を想う人も、皆恨む心を改め、足利へ従った。尊氏の威勢は自然に重くなり、武運はすぐに開け、天下はまた武家の世となった。

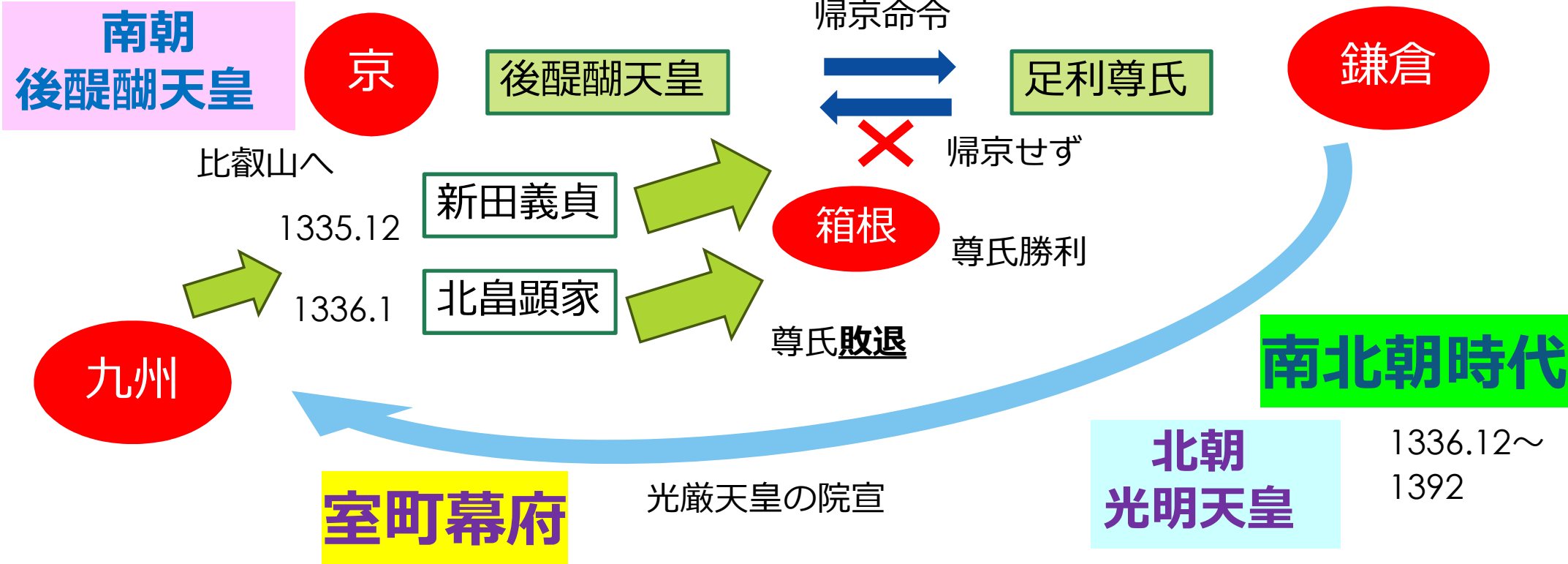
時行は已に関東して滅び、（略）今は平家の立直る事有り難しと思けん、其昔を忍びし人も皆怨敵の心を改めて、足利相公に属し奉らずと云ふ者無かりけり。さてこそ、尊氏卿の威勢自然に重く成て、武運忽ち開けければ、天下又武家の世とは成にけり。

卷十三「足利殿東国下向事付時行滅亡事」

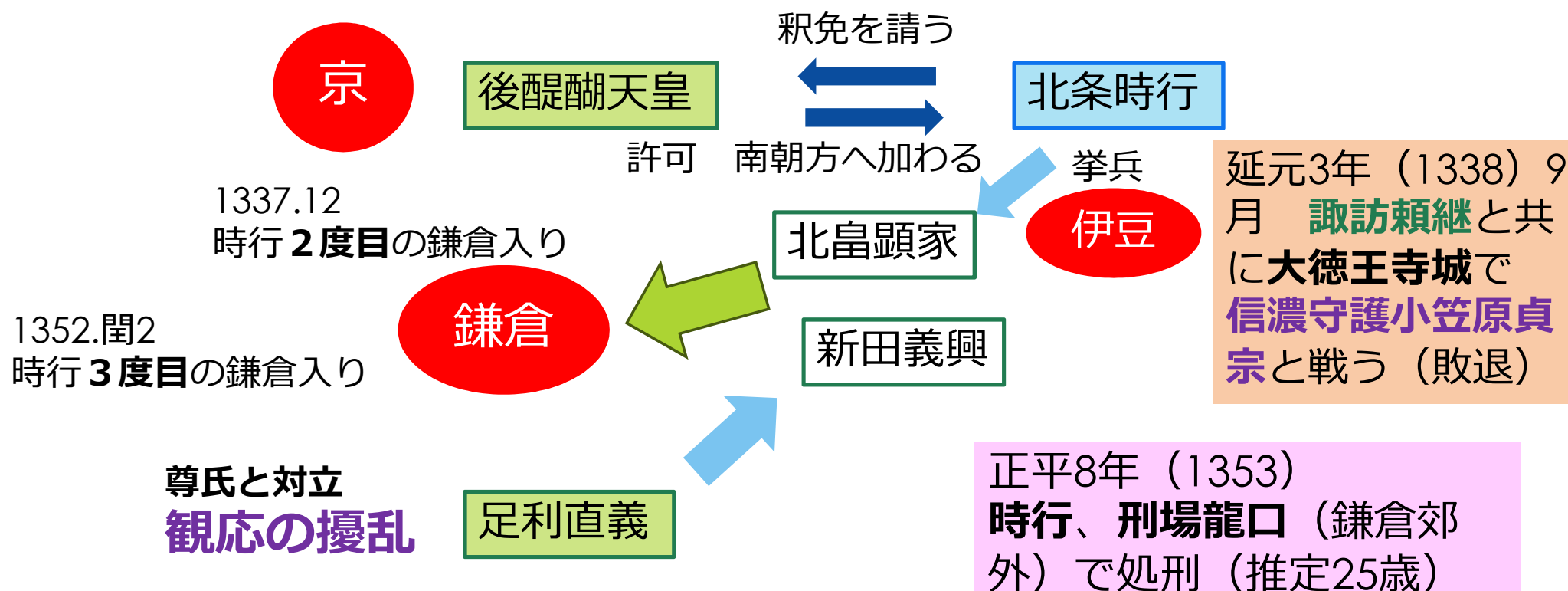
疑問 その③

諏訪頼重はなぜ**中先代の乱**に関わったのか。

中先代の乱後の尊氏



中先代の乱後の時行



中先代の乱が及ぼした影響

- ◆ 後醍醐天皇の建武の新政に対する武士たちの反乱は全国各地で起こった。
 - ◆ 特に北条氏一門（執権北条氏と、得宗被官を務めた北条氏の被官・被官の一族）が起こしたものが多く、それぞれが広域的に連動していた可能性もある。
 - ◆ 数多く起こった反乱の中で中先代の乱は（わずか二十日あまりではあったが）、足利軍に勝利して鎌倉を占拠した乱。
 - ◆ 建武政権を大きく揺るがし、足利尊氏が建武政権に離反するきっかけを作った。
- ➡南北朝時代へ突入
- ◆ 中先代の乱鎮圧後に尊氏は再び鎌倉を占領し、尊氏は武家政権のトップとして認識された。

➡室町幕府の成立

中先代の乱以後の諏訪

- ◆ 諏訪氏（**諏訪頼継**）と守護**小笠原氏**の戦いは室町時代になっても続いた。
 - ➡ **中先代の乱**は諏訪にとっては**小笠原氏**との戦いだったとも言える
- ◆ **中先代の乱**後、幼い**頼継**は上社**大祝**の位を下ろされる（原山へ隠匿）
 - ➡ 庶流の**藤沢政頼**が**大祝**を継承
 - ➡ 翌年**小笠原貞宗**によって復職
- ◆ **中先代の乱**・南北朝の動乱により**諏訪社**と**大祝家**の権威が大きく動揺。**諏訪社**と**大祝家**は**混迷と没落の危機**に。
 - ➡ **諏訪社再興**のために**大祝**の権威の立て直し・正当性の再構築が求められる

諏訪円忠『諏訪大明神画詞』を編纂

諏訪円忠

鎌倉幕府の奉行人であった叔父諏訪時光の養子。鎌倉に住む。

鎌倉幕府では奉行人、建武政権では**雑訴決断所**の評定衆を務める。

- ◆ **中先代の乱**（**頼朝**の**大祝**職没収）後自ら職を辞し、諏訪へ帰郷。
- ◆ 再び京へ上り、**夢窓疎石**の仲介により**足利尊氏**に仕官
- ◆ **天龍寺造宮奉行人**・室町幕府で**幕府引付衆**になる
- ◆ 諏訪上社は諏訪上社神宮寺執行職に任ずる
- ◆ 延文元年（1356）絵巻物『諏訪大明神縁起』（現在の『**諏訪大明神画詞**』）を編纂。
- ◆ **尊氏**が奥書を、北朝の**後光厳天皇**が外題を書く。

疑問 その④

諏訪円忠はなぜ諏訪大明神画詞を作成したのか。

ご清聴ありがとうございました